

研究・調査報告書

報告書番号	担当
601	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
<p>ADH1B*2 allele is protective against alcoholism but not chronic liver disease in the Hungarian population. ハンガリーの集団において ADH1B*2 対立遺伝子はアルコール依存症に対して保護作用はあるが慢性肝疾患にはなかった</p>	
執筆者	
Toth R, Pocsai Z, Fiatal S, Szeles G, Kardos L, Petrovski B, McKee M, Adany R.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction. 2010 May;105(5):891-6. Epub 2010 Mar 2.	
キーワード	
ハンガリー、慢性肝疾患、ADH1B*2対立遺伝子、	
<p>要 旨</p> <p>目的： ハンガリーにおいて慢性肝疾患 (CLDs) による標準化された死亡率はEUの平均より高い。アルコール脱水素酵素 (1B 48His もしくは ADH1B*2 対立遺伝子) を保有することは、アルコール依存症を減らすが、持続的な飲酒はCLDsのリスクを増加させることに影響するかもしれない。この研究の目的は、ハンガリーにおける遺伝子多型の有病率、飲酒量と、CLDsの関連について評価することを目的とする。</p> <p>方法と結果： CLDsと診断された278のケースと、肝機能に問題のない752の対照群、男性の年齢は45歳から64歳で、遺伝子多型 (ADH1B Arg48His 多形性 ADH1B*2) についてはスクリーニングを実施していた。対照群とケースにおける対立遺伝子頻度は、それぞれ8.31%と4.50% (χ^2検定=9.2, P=0.02) であった。ADH1B対立遺伝子の保有者はオッズ比 (OR) を飲酒頻度 (OR=0.63, P=0.003) で有意に下げる結果となった。CAGE (アルコール依存症セルフチェック表) における陽性反応の数はOR=0.50、P=0.005、CAGEで陽性の状態ではOR=0.55、P=0.007であった。ADH1Bと慢性肝疾患の間に有意な関連 (OR=0.50 P値0.003) があったが、CAGE状態と点数化はそれぞれOR=0.67 P値0.134、OR=0.67 P値0.148であった。飲酒頻度 (OR=0.61 P値=0.045) で調整した結果は弱まった。</p> <p>過度の飲酒者の間では、肝硬変のリスクの増大は見られなかったが、遺伝子系と、CAGE状態 (P値=0.003、P値0.042) の相互作用では有意に高く、CAGE陰性の群では慢性肝疾患のリスクはADH1B対立遺伝子でへることが分かった。</p> <p>結論： ハンガリーにおいて、ADH1B対立遺伝子はアルコール依存症のリスクを減らし、慢性肝疾患のリスクは大量飲酒者の間ではリスクになることが分かった。</p>	